
感謝の詩

馬路キレ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感謝の詩

【Nコード】

N2811E

【作者名】

馬路キレ子

【あらすじ】

忙しさに感じる内、失ってしまった感謝の言葉。育ててくれた両親への思いが、都会に埋もれる私を駆り立てる。

帰ろう帰ろう

私の故郷へ

帰ろう帰ろう

両親の元へ

忙しすぎる都会の毎日に追われて、
遠くに忘れた感謝の気持ちを伝えよう。

大した金も持たずに家を飛び出してから、かれこれ十五年。
初めて社会の厳しさを教わってから、仕事にあくせくすること十五年。

もう帰ってくるなと音信不通になった両親の遠い親族から、久々の
便りがあった。

両親が…という言葉以外は、電話口からまるで聞こえなかった。

電話を受け取った次の日から、私は人三倍仕事をこなして、
勤続以来、真面目を突き通した上司に、初めてつきたくもない無い
嘘をつき、

有給休暇をふんだくって、私は駆け出した。

結婚もせず、三十路も過ぎて心も体もくたびれて、
何一つ親孝行できなかった私が、

育ての親に、やっと感謝の言葉を言える時が来た

帰ろう帰ろう

私の故郷へ

帰ろう帰ろう

両親の元へ

だけど私が会った両親は、二人とも小さな箱の中に居た。石の部屋の中で、枯れた花束に囲われて悲しげだった。

冷たく彫られた名前と、白灰と線香の匂いだけが、肩を落とす私を迎えた。

私は、両親の眠る石の部屋の前で泣いた。

くたびれた顔を更にくしゃくしゃにしながら、何度も何度も泣いた。私は、線香を上げて花屋で買った一番上等の花で石の部屋を飾った。しかし、どんなことをしても、後悔が私の心を苛む。

誰でもいい、出来るなら、数秒でもいい、

石の部屋に閉じ込められた両親を生き返らせて欲しい
両親が聞こえる耳で、私のありがとうを伝えたい。

雨が降り出した。

私は、傘も差さずに寺を後にしようとした。

すると寺の住職が一本の傘を持って、こちらに駆け寄ってきた。
そして：私にこう言った。

「もしあなたが来たらと頼まれていたのですが」

「？」

「あなたのご両親の手紙を預かってます。これです、どうぞ」

住職は雨と涙でくしゃくしゃになった私の顔を覗くと、

傘と封筒に入った一枚の手紙を差し出して境内へと帰っていった。

私は、帰りの電車に乗りながら手紙を開いた。

そこに書いてあった文字は、蚯蚓がのたくったように汚く、私の記憶にかすかに残る、生きていた頃の両親の字だった。

『元気でいますか。家が貧しくて何かしてあげることも出来ませんでした。お前は少なくとも、老いてゆく私たちの生き甲斐でした。お葬式に呼ばなくてすいません。きつとお前は孝行者だから、私たち二人が死んだら何を放り出しても来てしまうでしょう。だから親族たちにも、私たちが死んでからお前を呼ぶように頼んだのです。悪く思わないでください。お前は悲しんではいけません。今すぐにも記憶から私たちの事を消しなさい。そして都会で成功して、幸せにな리なさい。それが私たちの最後の願いです。ありがとう、さようなら』

私は、優しすぎる両親を憎んだ。

何を言いたかったのかは十分理解できるが、生きている内に私のありがとうを受け取って欲しかった。だが、私の目には、すっかり涙が溜まっていた。そして思わず、呟いた。

「お父さん…お母さん…ありがとう…」

人目もはばからず私は泣いた。

涙に暮れる車窓の先には、都会のネオンが見えていた。

帰ろう帰ろう、私の故郷へ…

帰ろう帰ろう、両親の願いを叶えに…

（後書き）

母の日用に書いてたネタのため
ちよつと時期ズレしてるし、読みにくくてすみません。

まあ『孝行したい時に親はなし』なんて言葉がありますが、出来る
時にやつとけてことなんでしょうね。

やっぱり親子というのは、兄弟や親友や恋人と同じくらい、特別な
距離なんだと思います。

子は親を慕い、親は子を思ふつてのは普通の事なんですけど、近年の
ニユース見る限り、難しいんですかね？最近は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2811e/>

感謝の詩

2010年11月16日18時44分発行